



豊田資料館
郷土資料館
No. 82

Toyota City Museum
Of
Local History

如意寺書院



如意寺本堂



如意寺本堂



如意寺鐘楼



如意寺太鼓楼

目次

・国附町八柱神社の奉納剣 — 製作年号の刻まれた珍しい銘 —	2
・豊田市有形民俗文化財 だるまがま 寿町の達磨窯 ～村瀬さんと達磨窯～	4
・民具調査だより-9 商家の道具3 — 釦の硯蓋（いっかけのすすりぶた）	5
・平成24年度特別展準備レポート③	
ジャーナリストとしての岸田吟香 ～日本初の新聞記者、そして従軍記者～	6
・建物履歴の追求 文化財建造物の調査について	7
・文化財シリーズ 82 登録文化財 如意寺本堂・書院・山門・鐘楼・太鼓楼	8
・資料館NEWS	8

国附町八柱神社の奉納剣

——製作年号の刻まれた珍しい銘——

はじめに

国附町は豊田市市街から矢作川に沿って、県道355号線を14km程北に走った山間地域にあります。ここには江戸期まで、八王子権現宮・八王子社と称されていた八柱神社があり、ここに奉納されていた剣は現在、豊田市郷土資料館に寄託されています。平成15年10月の「資料館だより」No.45でこの剣は“越前康継作”と紹介され、同じく16年11月の『特別展献馬大将』の図録では領主であった石川氏と地名の由来、神社との関係を説明する中で、やはり越前康継作と述べられています。

これまで、この剣を中心に紹介したものは無く、あまり知られていませんでした。今回はこの剣の新しく分かったことについて報告します。

報告の内容

1) これまでの経緯

この神社には「八柱神社記録」が残っていて、『宝物 剣 壺振 但 三ッ葵紋付キアリ 銘 康継 元禄十四年三月吉日 源總乗』と書いてあります。他に社名、社格、祭神から神社に係る一切の項目が記載されており、古くから剣が存在していたことが知られます。この剣を寄託するにいたった事情を地元の区長からお聞きすると、神社が山間部にあるので管理が十分に行えず盗難が心配され、また日陰で湿気等、環境が悪く少しでも劣化を防止出来たらと資料館に保管をお願いしたとのことでした。

2) 剣の現状

剣とは反りが無く真直ぐで、刀身の左右が同じ形で、両側に刃がある刀です。平安時代からあり、古くは密教の祭具として製作されました。右にこの剣の主な寸法を示しました。

全体が錆びていますので、焼入れの様子が分かる刃文や鍛錬の様子が分る地紋は見ることが出来ません。幸い銘の切られている茎なかごの部分の錆びは進んでいません。



▲国附町八柱神社

3) 寄進者について

国附村は慶安4年(1651)から大島陣屋の石川氏が知行し、神社も貞享2年(1685)に石川氏が創建したと伝えられています(『角川日本地名大辞典』)。

大島石川氏は七千石の旗本で江戸に常駐していました。三代總乗が元禄12年(1699)に家督を承継しました。地元の伝承ではこの地に初めて領地を得たのでこれを寿ぎ、地名を“国附き”としたといわれています。そこで先祖が氏神として創建したという八柱神社に家督承継の御礼とし、元禄14年(1701)に奉納したのがこの剣ではないでしょうか。

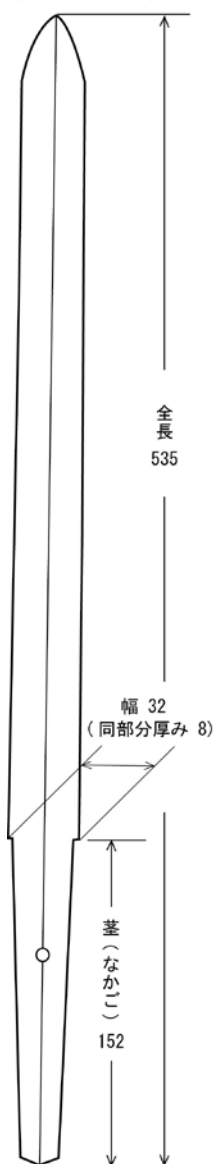
4) 作者のなぞ

「資料館だより」「図録」とともに越前康継作としています。

刀工の初代康継は近江国坂下(現滋賀県長浜市)の出身といわれ、後に越前に移住し結城秀康のお抱えになります。

戦国時代末期に「両御所様」(家

▼剣の主な寸法
(測定単位mm)



康、秀忠)により江戸に召し出され「康」の字を賜り康継と改名し、葵紋を自分の作った刀に切ることを許されました。

以降、江戸と越前で刀作りをしますが、三代目になり江戸系と越前系の二家に分かれ両家とも、幕末まで続きます。家康から破格の扱いを受けた康継についての研究は古くからありますが、未詳の部分も数多く残っています。

5) 銘について

銘は刀工が丹精込めて作った刀に自分の責任を表す為にタガネで茎に切り込みます。銘は古くから刀剣とその作者を結びつける基本的でかつ重要な情報として大事に扱われてきました。

例えば、銘に切り込む字体(形)は同じ家系でもそれぞれの各代で異なり、康継の場合は特に「継」の字の変化が知られていて、多くの研究が蓄積されています。また全ての刀に銘が切られている訳ではありませんし、製作した年号が入ったものは非常に少数です。この剣の奉納された元禄14年は江戸、越前系ともに第五代目の時代と考えられますが、この頃になりますと戦国末期に活躍した初代康継の時代に比べ平和な元禄の時代なので作刀そのものが激減します。薄い和紙に銘を写し取ったものが押型ですが、ほとんど残っていません。したがって製作した年号が分かるこの奉納剣は、康継を研究する上で非常に貴重な資料なのです。

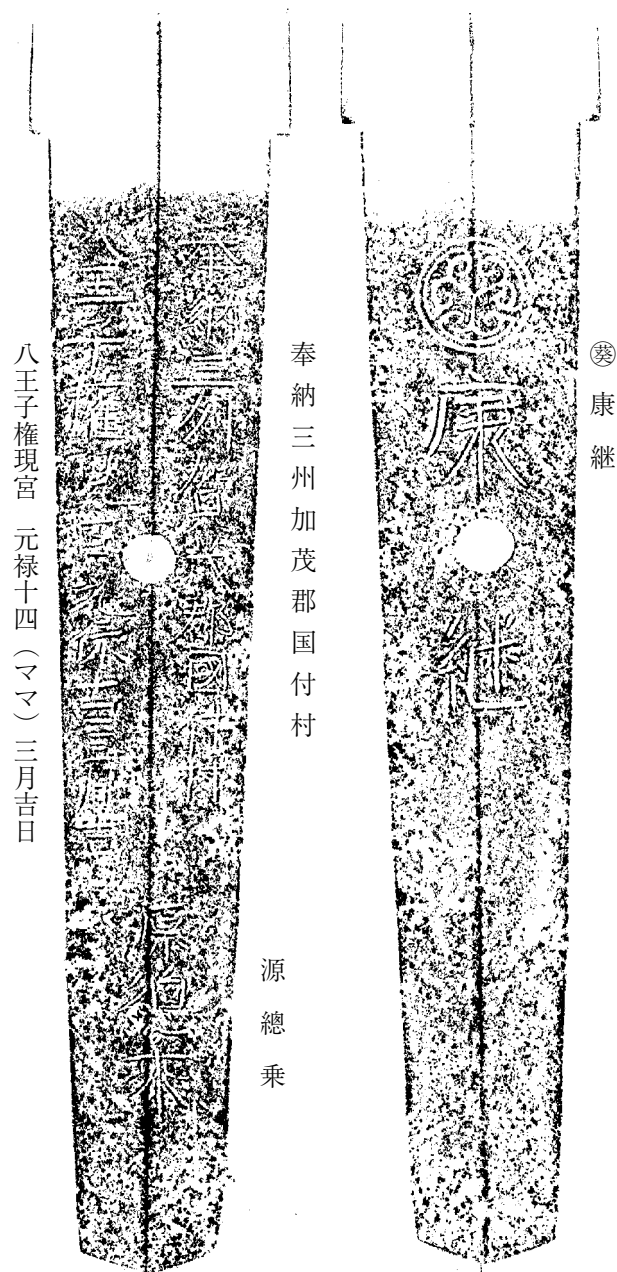
まとめ

「元禄十四(年)」と剣を作った年号のある貴重な銘ですが、対比すべき押型がとても少ないので江戸系か越前系かも含め何代康継の作品かを現時点で決めるのは困難です。しかし今後重要な資料とし価値が認められてくるでしょう。まずは錆びが進まないよう劣化防止に万全を期す必要があります。そして地域史を知る一つの切り口としてさらに踏み込んだ調査と情報発信に期待します。

また、豊田市郷土資料館には、この奉納剣と同じく康継の銘と葵紋の切られた「赤羽刀」(戦後の武装解除の一環として進駐軍に提出させられ、後に文化財として返還された刀剣)が数振所蔵されています。何時の日かこれらが一堂に公開展示されることを期待しています。(豊田市郷土史研究会会員 高橋碓之介)

押 型 (実物大)

作成：熱田神宮文化研究員 福井欽彦氏



<参考文献>

- ・明治三十六年九月拾五日八柱神社社掌
- ・月山峰太郎「八柱神社記録」
- ・豊田市郷土史研究会『研究紀要第九集』柴田知憲氏作製年表
- ・『角川日本地名大辞典23 愛知県』
- ・福井市立郷土歴史博物館『葵と菊』2009
- ・佐藤貫一著『康継大鑑』
- ・藤代興里著「康継代々小論」『刀剣美術』第254、352号
- ・『刀剣美術』『刀剣と歴史』『日本刀工辞典新刀編』
- ・他に各種押型の辞典、図版など多数

だるまがま 寿町の達磨窯

～材瀬さんと達磨窯～

平成24年9月7日、豊田市有形民俗文化財「寿町の達磨窯」の所有者である村瀬一二男氏がお亡くなりになりました(享年76歳)。このたび、達磨窯の保存と活用について尽力された村瀬氏への追悼の意を込めて、寿町の達磨窯保存会会長の加藤利幸氏より寄稿していただきました。



達磨窯を囲んで(村瀬さん：後列左端)

村瀬さんのこだわり

ずんぐりむっくりとした座禅をする達磨大師のような形をした寿町の達磨窯は、瓦製造業・村仙(村瀬仙次郎)の窯として大正10年(1921)頃に造られました。瓦産業に携わる人々は、その頃に碧南や高浜から移ってきました。粘土が豊富なのと雑木林で薪が取れたため、最盛期には30以上の工場が集積して達磨窯から立ち上がる黒煙が、この周辺の風物詩であったといえます。生産高も県下で2～3位で、形ができていれば売れる時代でボロモウケしたといわれています。しかし、伊勢湾台風後は、洋館プレハブ時代に入り需用がさっぱりだったり、人手も自動車産業に取られたり、煙突から出る煤煙が公害問題となったりして衰退し、故・村瀬一二男さんも昭和56年(1981)に、窯に焼くための瓦を入れたまま「やめたあ～!」となりました。多くの窯が宅地化のために取り壊されましたが、達磨窯は、村瀬さんの先祖の残した物(窯)に対する強いこだわりで、築造当時に近い形のまま残されました。以後達磨窯は風雨にさらされ表面の土が削られ段々と細っていききました。そこで、村瀬さんは、トラックの荷台用のシートで窯を覆いました。しかし雑草が根強くシートを突き破って芽を出しました。シートもボロボロになったので、新しいブルーシートで覆いました。が、それも役には立ちませんでした。窯はどんどん削られやせ細っていききました。なんとか現状の姿のまま保存せねばと、前・鈴木公平市長さんに直談判し「全国的にも珍しい窯業史上貴重な遺産であるので、文化財に

してせめて屋根だけでも……」との思いが届きました。

平成20年6月に「豊田市有形民俗文化財」に指定され、念願の屋根ができました。村瀬さんは、平成20年の近代化遺産「とよたの魅力再発見ツアー」を始め、発見館主催「達磨窯見学会」、子ども塾、老人クラブなどの見学の説明に奔走しました。現在も、乾燥の為に窯は少しずつ痩せ細っていつているので、土の塊になるのではとの心配があります。

瓦が残っている達磨窯

外観に痛みはあるものの、最後の焼成のものと思われる瓦が取り出されないままの状態に残っています。窯の両焚口間の長さは約6m、中心部の横幅は約3.3m、高さは2.1mほどです。達磨窯は、使う頻度によっては3～4年で造りかえるといわれますが、この窯は補修のみで長期間にわたって使われてきました。現存する達磨窯としては、国内最古級のものといわれています。

達磨窯の構造

達磨窯の構造は、窯の本体と地下構造や床に煉瓦を使うほかは、竹で窯型を造り、菰を被せてすさを混ぜ合わせた赤土で作ります。さらに屑瓦を赤土の間に入れ込んで強度を持たせています。窯の内部は、粘土と赤土を練ったものが使っています。窯の構造は、地下に掘った燃焼室と瓦を詰め込む焼成室からなっています。瓦の出し入れは、窯の中央部の窯口から行い、焼成時にはここを塞ぎ、この上部に土管などで煙突を付けます。この窯は、前後に窯口を持っています。

一窯 800枚

瓦は、①粘土の採取②粘土の調整③成型④乾燥⑤焼成の工程を経て作られます。一回の操業は、4日かかりです。成型した



瓦を干す男

瓦を天日で白くなるまで干して800枚近い瓦を一日で詰め、ゆっくりと温度をあげていく「あぶり」から本焚き終了までさらに丸一日かかります。最後に「松葉」などで燻し、冷やします。しかし改良はあったものの、達磨窯の焼成では、常に不良品が出るという問題がありました。それは、瓦を置く位置によってムラができるためで、6段に積んだ瓦のうち、最上段の瓦は焼きが甘く、使い物にならなかったといえます。

(寿町の達磨窯保存会会長 加藤利幸)

商家の道具3- 釦の硯蓋 (いっかけのすずりぶた)

硯蓋

「旧紙屋鈴木家住宅」での民具調査が続いていますが、さすがに旧家だけあって従来の民具調査ではあまり目にする事のない道具たちがたくさん現れます。中でも“懷石家具”という言葉でくくられる様々な椀や膳の類には、その名称を特定するのにも苦戦を強いられています…。表題の硯蓋もその内のひとつです。硯蓋を検索してみると「江戸時代に出現したもので、卓袱料理や砂糖の普及ともからんでいると思われる特異な献立である。当初は文字通り、硯箱の蓋に供されたともいわれる。硯蓋に出される料理はきんとん、羊羹、寒天菓子等の甘味類、あるいは蒲鉾、牛蒡や小魚の佃煮といった保存のきく食物が多く、これらは賓客が持ち帰る慣わしであった。ちなみに、御節料理としてお馴染みの伊達巻も硯蓋でよく出された料理といわれ、長崎では食感や製法の類似性から“カステラかまぼこ”とも呼ばれており、この三つの関連性は高いと思われる。懷石料理における八寸に似ているが、八寸がその場で食べて(これを食い切りという)、料理も酒肴に近い物が供されるが、硯蓋は前記菓子類や保存性の高い食品が盛られる。関西では硯蓋の料理を口取りといい、内容は似ているがその場で食べる慣わしであった。現在はコストや習慣の問題から廃れている」とあります。

硯箱の蓋を用いたという事ですので、盆状であったわけですが、後にはこれに足を付けたものが現れてきます。大きさも様々で、写真で示した旧紙屋鈴木家の硯蓋くらいの寸法の物が一般的であるようですが、私が譲りうけた碧南市の伊藤家で使われていた『黒 扇模様 輪寫大硯蓋』と箱書きのあるそれは、W1160mm H53mm D604mmと大型で足のない盆状のものです。



【写真-1】硯蓋 天保十一年(1840)庚子十二月の墨書あり
W470 H124 D340

供される食品も多様ではありますが、もともと本膳料理での後段の酒の肴を盛ったものが、懷石に取り入れられ同様の使い方がされたのが始まりのようです。八寸のように酒肴が始まりで、食い切りであったものが、持ち帰りの干菓子類に変わっていったものでしょうか。また、山形県の米沢地方では引き出物に使われる鯛のお菓子を硯蓋と呼ぶそうです。

釦って

“釦”はボタンではなく、“いっかけ”と読みます。[写真-1]の箱書きに『黒釦』と記されています。…読めない!「くろぼたん」?意味が解らない。とりあえず写真を撮り、採寸をして登録をする訳ですが、そのままにはしておけないので後で調べなければいけません。旧紙屋鈴木家ではこの調べる作業がとて多く、随分と勉強をさせて頂きました。解らない事、知らない事を学べるのはとても楽しい作業です。

“いっかけ”を漆芸の項目でボタンという漢字を入れて検索してみると、答えが出ました。そこには「木杯、吸物椀、盆などの縁や、小箱など漆器の合口に金銀粉を蒔いて装飾したもので、漆のナヤシ(練る)行程を長時間かけてつくった、粘りの強い釦漆を塗り、金消粉を蒔きつける。器物の縁を金属でおおう妖懸からの転語とおもわれる。よく見かけるものに賞状盆がある」と。釦漆は金箔を貼る時にも使用するようです。また“金釦漆”は釦漆に多量の石黄を加え、さらに粘度調節のために樟脳を混合して作ります。

[写真-2]の箱書きにはひらがなで“いっかけ”と書かれています。笹の葉模様の蒔絵の施されたとてもきれいな硯蓋で“切足”と足の仕様も箱書きに記してあります。(東海民具学会 岡本大三郎)



【写真-2】硯蓋 嘉永元年(1848)申 十一月の墨書あり
W336 H155 D293

ジャーナリストとしての岸田吟香

～日本初の新聞記者、そして従軍記者～

■『新聞紙』の創刊と『海外新聞』

元治元年(1864)、ヘボン邸に通った吟香は、そこでジョセフ・ヒコ(浜田彦蔵)と出会います。ヒコは大嵐で漂流した際にアメリカ船に拾われ、安政6年(1859)にアメリカ領事館の通訳として帰国していました。吟香はヒコから、アメリカにはその日の出来事を記事にして知らせるニュース・ペーパーなるもの、つまり新聞があることを教えられます。二人はすぐに意気投合し、本間清雄を加えて新聞を刊行することになりました。吟香31歳、ヒコ26歳、本間21歳という若き三人です。

実はこれに先立つ文久2年(1862)には、幕府が『官板バタヒヤ新聞』を発行していますが、これはオランダの機関紙を翻訳・編集しただけのものでした。

我が国最初の民間新聞『新聞紙』が三人の手によって発行されたのは元治元年6月。横浜に入港する海外船から新聞を入手し、ヒコが要点を語り、吟香がかな交じりの文章にして、本間が和紙に書写したとされます。そこには下関戦争など日本人が興味をもつ記事が掲載されており、吟香は日本初の新聞記者の一人であったといってもよいでしょう。

『新聞紙』は2・3ヶ月で廃刊となりますが、その翌年に『海外新聞』と改題して復活します。第二号には、「童子之輩にも読なんことを欲すれハ文章之雅俗は問はずして」とあり、船乗りとして育ったヒコと、深い教養に支えられつつ庶民の言葉を操る吟香の心意気を良く伝えています。

やがて、吟香が辞書作りに奔走するようになり、『海外新聞』は終刊となります。しかし、彼らの挑戦は近代ジャーナリズムのさきがけとなるものであり、現代社会にも不可欠な新聞が、その記念すべき第一歩をしるしたものであったのです。

■『横浜新報もしほ草』の刊行

江戸時代が終わろうとする慶応4年(1868)2月から5月にかけて、江戸・横浜には十を超す新聞が登場します。その中の1つ『横浜新報もしほ草』は、発行者が

横浜居留地に住むアメリカ人ヴァン・リードとなっていたため、治外法権下での発行でした。ところがこの新聞、ヴァン・リードの名を隠れ蓑にして、実は吟香が自由に筆を振っていたのです。文章はかなが多く、他の新聞に比べると実に易しい構成となっています。記事には、「今日平尾にて、官軍に生捕られたる近藤勇を死刑に行ひ、其首を京師に送る。」といった情報や、「当今日本の急務は、内乱ををさむるにあり。」「日本人地図を見て、其國の極小なるを知るべし。」などの主張がある一方、「奥州よりきたりし人のものがたり」として、「ともかくも、はやくいくさがやまねば、百姓もこまる、職人もこまる、ほうずもこまる、やまぶしも、やくしやも、げいしやもこまる、商人がいちばんこまる、あゝこまつたものだ、はやくもとの太平にしてくださいまし。」と訴えています。戊辰戦争を早く終わらすべきという意見を、武士のみならずさまざまな階級の人たちに伝えようとする吟香の思いが見え隠れしています。

■東京日日新聞に登場

慶応4年(1868)から明治5年(1872)にかけて、吟香は蒸気船事業や石油掘削、製氷など、前例のない事業に次々と挑戦します。しかし、明治5年には持ち船を売却し、その翌年には『東京日日新聞』に主筆として迎えられます。ジャーナリスト吟香の復活です。ここでの吟香を最も知らしめているのは、明治7年(1874)の台湾出兵に、日本初の従軍記者として同行したことです。吟香の巧みな文章と絵で構成された記事は、国民が待ち望むものとなり、吟香は錦絵新聞などにも描かれて、大いにその名を高めました。



台湾の吟香を描いた錦絵新聞

吟香の書く記事は、当時主流であった論説によって人を「動かす」ものではなく、あくまでも庶民の目線に立って「伝える」ものとして、すこぶる評判でした。儒者を勤めたほどの吟香が拳母藩を脱藩し、市井の人々と暮らしてきた人生を振り返ってみれば、うなずけるものがあるのではないのでしょうか。(森 泰通)

建物履歴の追求 文化財建造物の調査について

日本は太古から豊かな森に恵まれており、木造の建物が盛んに建てられました。建築の材料として木材は、軽く加工がしやすいという特長がありますが、虫や湿気などの被害を受けやすいという弱点を持っています。

先人は、山から木材を供給し、切られたところに植林し、大規模な修理にまたその木材を活用するという優れた仕組みを成立させていました。

皆さんご存知の最古の木造建築である法隆寺は、奈良時代から適切な時期に修理を繰り返しながら、良好にその姿を伝えています。このほか木造の建物は、使い続けるために例外なく定期的な修理が必要です。文化財に指定されている建物は、未来にその価値を伝えるため、詳細に調査を行いながら、歴史的価値を減じない手法で修理を行います。

今回のテーマは、あまり知られることのない文化財の修理の調査にスポットを当てます。

文化財の修理で一番大事なのは、調査です。調査と言っても絵図や文書などの史料調査や、建物の実態を調べる現状調査があります。昔の建物には設計図はないので、現状の図面作成から始まり損傷度合いなどを調べ、これらの調査を基に修理計画を立てるのです。



写真1 現地調査では、現状を詳細に記録します。

長い年月を経ている建物は、使い勝手などの様々な理由で、改造をされているケースが数多くあります。木造の伝統的な工法の建物は、部材をつなぐ時に、ノミなどの道具で仕口^{しぐち}と呼ばれる加工をして、釘を使わずに組み上げています。増築など建物を改造する際には、新たに仕口を作るので、現状調査にて使っていない仕口が見つかるということからは、過去に建物が改

造されたということが分かります。

現地調査では、建物履歴を探るために情報（使っている材料やその加工方法など）を詳細に調べ、さらに修理工事の途中にも、調査は続きます。部材を解体すると、見えなかった部分が見えることで、さらに深く情報を得ることができるからです。

このように調査では、粘り強く情報を集めるのですが、すべての情報が残っているとは限らないので、判明した情報をパズルのように組み合わせて、改造などの建物履歴を探るのです。

文化財である建物の修理では、しばしば歴史的根拠を基に、ある時点の姿にもどすこと（復原^{*1}）が行われます。復原の検討のためにも、調査により建物の改変履歴などを明確にすることがとても重要です。

豊田市足助町にある旧紙屋鈴木家住宅（豊田市指定文化財）の旦過寮^{たんがりょう}と呼ばれる建物で、現在修理工事を行っています。旦過寮は、足助の香積寺の修行僧が宿泊した建物と言われ、絵図によると、文政期（西暦1830年ごろ）に建築され、弘化～嘉永期ごろに増築をしている建物です。

詳細調査の結果、一定の高さで窓などの位置を付け替えている形跡や、改造したあとを隠す埋木に墨書などが見られたことにより、明治31年(1898)に改造を行って、建物の柱の足元を切り縮めしたことが判明しました。

修理前には、不自然な納まりになっていた屋根形状が、明治期の改造によるものと分かり、雨漏りをしやすい形態の改善と歴史性を踏まえ改造前の姿に復原しました。この成果は、地道に調査を行った賜物です。

（松川 智一）

*1 復原[復元]：歴史的資料を根拠にして、歴史上のある時点の姿にもどす作業（「建築学用語辞典」日本建築学会編）

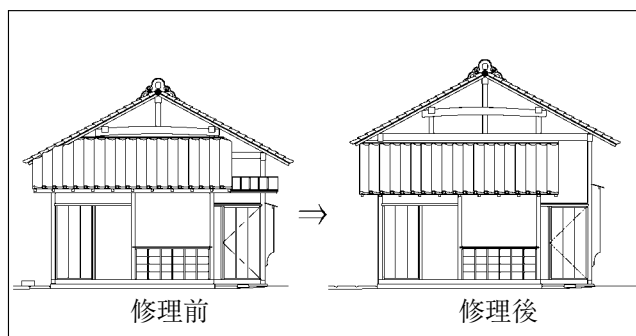


写真2 旧紙屋鈴木家旦過寮の復原前後の姿

文化財シリーズ

82

登録文化財

如意寺本堂・書院・
山門・鐘楼・太鼓楼

如意寺は浄土真宗大谷派に属す寺院です。寺の言い伝えによると親鸞聖人の弟子である源海上人によって、文永元年(1264)武蔵国荒木村(現埼玉県行田市)に創建されました。もとは満福寺といましたが、正中2年(1325)衣城主中条秀長の招きにより青木原(現豊田市花本町)に堂を建立し、本願寺三世覚如上人から「如」の字を賜り如意寺と名を改めたといいます。貞和元年(1345)志多利郷(現豊田市石野町)に移転し、さらに慶長10年(1605)に現在地(力石町)に寺地を移して堂を再建しました。その後、二十世源秀の代である文政から天保年間(1818～1843)に現在の伽藍が整えられました。

この如意寺の本堂・書院・山門・鐘楼・太鼓楼が、「国土の歴史的景観に寄与しているもの」として、国の登録文化財に答申されました。本堂は大型かつ装飾

が豊かであり、江戸後期における当地方の真宗寺院の代表例です。書院は上段の間を持つ格調高い造りをしています。山門・鐘楼についても格調高い寺院として丁寧で統一した造りをしています。太鼓楼は真宗伽藍特有の建物であり、上層部は当初の様子がよく残っています。如意寺は、真宗独特の伽藍がよく残る格式高い寺院といえます。



如意寺山門

資料館NEWS

文化財見学ツアー

「平勝寺の仏像～観音像に出会う旅～」 催行

10月2日(火)、豊田市郷土資料館の企画展及び三重県菰野町にあるパラミタミュージアムの特別展を見学するツアーを開催しました。郷土資料館では平勝寺の「木造二天立像」(多聞天・持国天)を見学し、パラミタミュージアムでは同じく平勝寺の「木造観音菩薩坐像」を見学しました。平勝寺の秘仏を見学できる貴重な機会であり、とりわけ「木造観音菩薩坐像」については通常17年に一度しか拝観できないということもあり、参加者は熱心に見学していました。



博物館実習

8月29日(水)から9月4日(火)まで、博物館学芸員を目指す大学生5名が、郷土資料館で実習を受けました。資料の取り扱いや写真撮影の方法、分類整理から台帳の作成方法まで、資料館で行われている様々な実務を経験しました。

シラヒゲソウ開花

今年も9月下旬から市指定天然記念物シラヒゲソウの花が咲きはじめました。当初は開花数が少なく心配



されましたが、無事多くの花を咲かせてくれました。来年も多くの花を咲かせて欲しいと願うばかりです。

利用案内

開館時間 9:00～17:00
休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)
入場料 無料(特別展開催中は有料)
交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分
名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分
愛知環状線「新豊田駅」より 徒歩15分
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ徒歩5分
駐車場 約20台

■豊田市郷土資料館だより No.82■

平成24年11月30日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: <http://www.toyota-rekihaku.com>

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。